

GRIPS 国内同窓会報

発行日：2020年3月25日 発行者：政策研究大学院大学国内同窓会 発行責任者：名取はにわ

事務局連絡先：〒106-8677 東京都港区六本木7-22-1 TEL 03-6439-6048 E-mail alumni@grips.ac.jp

GRIPS 恩師インタビュー第3回 児玉文雄先生（東京大学名誉教授）～社会人学生と共に



児玉 文雄先生 プロフィール

1964年東京大学工学部機械工学科卒、埼玉大学大学院政策科学研究科教授、科学技術政策研究所、ハーバード大学客員教授、スタンフォード大学客員教授、東京大学先端科学技術研究センター教授、先端経済工学センター長、東京大学名誉教授、芝浦工業大学専門職大学院教授・技術経営研究センター長、日本MOT学会長、日本技術計画学会会長など歴任。工学博士（東京大学）。吉野作造賞、科学技術長官賞受賞。著書「技術経営戦略」 Ohmsha 2007年など

CONTENTS

GRIPS恩師インタビュー第3回

児玉文雄先生（東京大学名誉教授）	1
国内同窓会第二期役員体制発足	5
国内同窓会副会長・幹事プロフィール	6
2019年度国内同窓会を開催しました	7
国内同窓会支部活動報告	8
修了生紹介～政策の現場から	
半井真司さん（JR四国代表取締役社長）	10
大学の動き	11
国内同窓会からのご案内・大学からのご案内・編集後記	12



GRIPS 秋季学位授与式 2019年9月11日

小谷※ ご無沙汰してました。先生もお元気そうで何よりです。（※1988年GRIPS修了 同窓会幹事）

児玉 この歳になるとどこか具合が悪くなるようで、大したことはないけど、心臓にペースメーカーを入れたんだよ。

小谷 それは先生、大したことないということではないと思いますが。普段の生活に影響はないのですか？

児玉 うーん。きっかけは大したことなかったけどね、ペースメーカーは心臓の脈動が低くなったときに働いてくれるだけで、普段は何でもない。

小谷 それでは本題に入らせていただきますが、児玉先生は埼玉大学を皮切りに、いろいろな組織をご経験されていますが、演題「社会人学生と共に」も含めお聞かせください。

児玉 私は、埼玉大学政策研究科では約10年間お世話になったのですが、実は籍としてはかなり遅くまであったんですよね。実質的には1987年に科学技術庁の研究所に出向し、その後アメリカのハーバード大学、スタンフォード大学などに行ったりして、帰ってきて最終的に東大に行くちょっと前ぐらいだったんですけどね、埼玉大学の籍を離れて、それからあと技術マネジメントといいますかね、そういう研究をずっと続けてきたんですよね。この学芸活動中、ずっと学生は社会人学生で、共に歩んできたということです。

小谷 学生はほとんど社会人だったということですが、その始まりなどのご経験をお聞かせ願えますか。

児玉 今までの学芸生活を改めて見るとね。結局出発点はどこにあったかというと。埼玉大学の政策科学研究科ではなかったかと、今思い起こすわけですね。で、それは当時政策科学研究科が、埼玉大学に全国で初めて創設されて、しかも学生さんは公務員などを中心とした社会人学生だったんですよね。そういう人を対象として、まあ教育が始まったというのがいわば政策科学研究科の出発点でした。

それと同時に、修士論文を充実したものにしていったというのが特徴で、そういう修士論文を社会人学生諸氏と一緒にやったということが、あとの著作

に結びついたということなんですね。

かなり若い時だったから、それが研究の基礎になった。その時も論文はいくつか書いていたと思うけど、著書はあまり大きなものを出さなかったよね。

もう一つは「社会人学生とともに」ということで、埼玉大学で始まって、アメリカの大学に行って、東京大学、芝浦工業大学と定年で終わるまでずっと社会人学生の教育なんですよ。

相手は違うんだけど、米国の大学では米国人であり、東京大学では博士課程の社会人学生、芝浦工業大学は民間の企業人で自前で時間を作り学業に励んだ方々です。社会人教育に結局従事し続けたんですよ。

埼玉大学の国際プログラムも最初の2年ぐらい指導していた。留学生のYadaさんも修士論文を1年ぐらい指導した。それも社会人ですよ。だから国の内外で、社会人を中心に論文指導を通じてやったものが私自身の業績に積み上げられてきたということだと思ふところですよ。

小谷 社会人学生の教育というのは、当時は珍しかったと思いますが、そのあたりの苦労話などありましたらお聞かせいただけますか。

児玉 研究を続けて世の中に公表していったということをお話してみよう。

まず、埼玉大学の公務員、準公務員の学生派遣というのは日本で初めてのものであって。今からその後の私の経験を振り返ってみると、その派遣もかなり本格的であったと。いわゆるパートタイムとか夜や週末ではなく2年間フルタイムで出向という形で学習・研究に専念できたわけですね。それは後で考えればかなり特異だった、そんな結構な話は、あんまりないと思うよ。あのころだから2年間がっちりというのは。

小谷 私も本当にこの2年間の経験は貴重で、その後の仕事の捉え方も違ってきただけです。

児玉 2年間非常に充実した学習と研究ですね、そういうのが出発点だったというのが私にとって非常に幸運だった。あとで振り返ってみよう。

社会人学生の教育・研究というのは日本で初めて

だったわけですね。ということは学ぶ方も大変でしょうけど、教える方はもっと大変で。要するに一緒に作り上げるという、しかも学生さんがフルタイムで2年間というのはそういう意味で重要だった。お互いに学習しながら研究を作り上げていったということで、それがフルタイムで2年間あったということだったわけです。そういうことが非常に重要だったと思います。で、結局そこで私自身は後に展開するMOT (Management of Technology)とか技術政策の基礎的な研究成果を作り上げて、それをさらに発展させたという形に結局なったんですね。あとで振り返ってみると。

2年間フルタイムで完全に出向という環境で達成できた修士論文は今から振り返ってみてもかなり充実した内容のものだったと思います。

小谷 先生は埼玉大学の後、アメリカでも教鞭をとられています。当時のアメリカと日本の違いなどはどうでしたか。

児玉 当時政策科学というか政策マネジメントも含めて研究論文は日本にはほとんど無かった。それは何故かというと日本にビジネススクールはないでしょ。アメリカはビジネススクールは多いし、パブリックアドミニストレーションも多少ありました。何しろビジネススクールが相当なものでね、日本にとっては新しかったかもしれないけどアメリカにとってはむしろ当たり前だった。例えばハーバード大とかイェール大とかシカゴ大などスタンフォード大も含めるけど特に東海岸のアイビーリーグといわれる学校ね。結局ビジネススクールの先生の数が一番多いんですよ。だから、教授陣の数でいうと最大の学部・学科なんですよ。というのは社会人を教育するというのは大変なんです。アメリカではそれは常識になっている。

考えてみれば日本で初めてだった。日本では問題ありますね。この分野では全然成長していないでしょ。

日本の失われた20年か30年か知らないけど、その最大の原因が、これであると言いきることができるのではないかと思います。従来の惰性に引っ張られていて、本当の意味で戦略を立てることが出来ないでいたんですね。戦略というのはトップダウンだからね。下からのワーワーやってなんとなく決まってくるという話では、ダメなんです。そういうことが非常に重要だったと思うんですよ。だから、日本にとって珍しかったアメリカ以外の国には珍しいですよ。アメリカは常にトップを走っていたのを皆さん観察したでしょ。だって、日本は追いついたと思ったらGAFA(グーグル、アップル、フェイスブック、アマゾン)みたいなのが出てきて。GAFAは全部アメリカの会社ですよ。だから日本だけじゃなしに世界があっけにとられていた。GAFAの時価総額の合計がね、かつてのオイルメジャーの時価総額の合計を抜いたんですよ。確か2010年ぐらいでした。その予兆は実はアメリカにいた時に感じましたね。間近にそうなるんじゃないかねと。日本へ帰ってきて自信を持って言えなかったけど。まあそういうことだったわけです。

小谷 先ほどの話でアメリカでは当たり前だけど、日本では最初だったという社会人教育における当時の悩みや苦労などはどうでしたか。

児玉 いろいろと小谷君も研究をやっているわかったと思うけど、先行研究なんてほとんどないでしょ。初めてやるという。それから後で考えてみたらデータベースが整ってなかった。僕の研究室を出た人は必死になってデータを探し回った。小谷君が取組んだ共同特許のね、あれ特許データベースだったでしょ。今、特許を基にしたMOTとか科学技術政策の論文

は多いんですけど、コンピュータでデータを取って、計算して終わりというのが多い。当時は研究用のデータベースも見つけなければいけなかった。必死になってね。そういう状況で色々な分析をやったんだけど、少なくとも問題設定は間違っていなかったと。そう思うでしょ。

しかもそれが独創的なものだったと。その辺はアメリカのビジネススクールにも決して引けを取らないと思っている。数は比較にならないが。

小谷 埼玉時代が出発点だったということですが、先行研究もないデータベースもない中での当時の論文の取り組みなどお聞かせください。

児玉 一段落ついて10年ぐらいいかな。小谷君なんかは最後の方だったんじゃないかな。東京都から来た牛田君は君と一緒にいたかな。彼の修士論文は正式な論文として公表されたんだよ。学生論文として表彰されたんではなく、本当の論文としてすんなり。国鉄から来た鎌田君は学会のフルペーパーとしてアクセプトされて学会誌に載っている。

他にもいくつかあったと思うんだけど、それくらいの完成度があつたんですよ。本田君なんかの論文もそうなんだけれど。彼の論文は学会の論文として彼自身はやらなかったと思うけど。まあ、とにかくそういうのが色々10年ぐらいやっててね。そんなことやって、色々個別の論文として独創的なものができてきたんで、それを僕が指導しているんだから僕の頭の中では一貫性をもってまとまっていて、それを再構成して自分自身で再編集することが必要だと思ってた時期に、科学技術庁の科学技術政策研究所に出向してみた。1988年かな。

小谷 それでは、科学技術政策研究所時代のお話をお願いできますか。

児玉 これは吉村先生の話から実現したもの。そこで教育から離れる一つのチャンスを与えられた。それで研究と同時に管理職にもなった。科学技術政策研究所では、何をやっていいかわからないこともあり、それで、10年にわたる研究をとにかく一つの本にしようとして書いていったのが「ハイテク技術のパラダイム」になった。そういう機会を得たわけだね。総括作業として。

その総括作業(執筆)、最初は英語で出したんですね。日本語版はそれから自ら日本語に翻訳して出版したのです。

小谷 「ハイテク技術のパラダイム」の原稿は英語だったのですか、新渡戸稲造の「武士道」みたいな話ですね。

児玉 あとでその過程を考えれば、あらゆる修士論文などを見ながら、やっぱり普遍的なものでなければ論文にはならない。普遍性を追求する手段として英語というのがあるんじゃないかと思うんですよ。だから英語が苦手だ、そんなことじゃなしに、英語で書けなかったら論文にならないですよ。英語で書いてそれを日本語に翻訳して発表してもいいんですよ。そういった作業が非常に役に立ったし、これはお勧めね、皆さんに。

逆に日本語で書いて英語に翻訳しても論文にならないでしょ。ある種の普遍的なフレームワークで書かなければ英語にならないでしょ。そこなんだよね。英語で書くというのはね。

小谷 科学技術政策研究所時代は社会人学生と離れたわけですよ。

児玉 2年半ぐらい逆に論文指導といった直接的な指導から解放されてね、そういった時間を得たというのも意義があつたんじゃないかと思う。

しかし、科学技術政策研究所時代の学生ではないんだけど、僕の第一部門の部下は、4人ぐらい外人でね、一人だけ日本人でね。そこにいた4人はみな偉くなっているんだ。アメリカの大学の研究科長もいるし、クリントンの時の科学技術政策局のスタッフなど、すべて活躍中だね。イタリアから来ていた方も活躍していると聞きますね。そういったことがバックにあったんで、執筆も順調にできた。

小谷 教育機関ではないけど、海外の学生と一緒に励んで「ハイテク技術のパラダイム」が完成したんですね。その直後にアメリカの大学で教鞭をとったようですが。

児玉 普遍的体系化された教科書らしきものができたんでね。アメリカへちょうど行く機会があったんで行きました。ハーバード大とスタンフォード大に行ったんだけど、ハーバード大のケネディスクールというのは結局政策科学研究科みたいなもんだね。ケネディの時にできたんです。1991年に英語の教科書もあるしといったことで、講義したわけですよ。

小谷 学生の方々のバックグラウンドや反応はどうでしたか。

児玉 学生はというとこれまた、社会経験を積んだ学生集団で、アメリカですから自分の意志で上昇指向(Upward Mobility)を目標にして、研究科に入学してきたエリート集団ですね。要するにアメリカの場合、同じ企業においてある職種で採用されるでしょ。そのままいったら自動的に上がるというものではない。それはどっかで学位をつけるとか、何とか外へ行くとかということで付加価値がついてマネジャーになる。修士とか何か取らないと上に行けない仕組みとなっている。まあ、そういうのでここは「Kennedy School of Government」だから公共政策、政策科学とちょっと似ていたんだけどね。そういうエリート集団を対象に講義しました。それは実は僕一人ではなしに同僚がいて、IBMの当時のチーフサイエンティスト、副社長で、ハーバード大学教授になった人と一緒に講義を行った。

小谷 社会経験を積んでいないのは児玉先生だけということですか、そのような環境での講義で不都合はありませんでしたか。

児玉 社会経験を積んでいる人ばかりなんだ僕以外は。考えてみたらね。私自身以外は学生さんも同僚も皆そういうことで。私自身はそういうことを吸収して論文に仕立て上げた。アメリカで社会人相手に講義するというのは埼玉大学でかなり慣れてきたからね。そういう経験が非常に役に立ったと思いますね。

小谷 1980年代は日本の産業界はこの世の春の時代だったかと、学生の反応はいかがでしたか。

児玉 学生さん皆さんが日本のことに興味を持ったのは日本の産業が特に電子産業が絶頂期ということで、それは何か秘訣があるんじゃないか。聞く耳を持っていた。今だったらどうか怪しいですね。

小谷 やっぱ、当時の日本の産業興隆の特徴を明らかにした問題設定が間違っていなかったということでしょうか。海外で教鞭を取っておられて思い出深いことがありましたらお願いしたいのですが。

児玉 この時期に埼玉時代にタイから留学していたYadaさん(※Yada女史1984年入学国際プログラム一期生)の話があります。直接ハーバードとは関係はないんだけど、この時期に非常に記憶に残るのは英国の大学の学会で私が記念講演をした時、突然私の前に現れたのがYadaさんだった。僕は留学しているのは知らなかったけど、向こうは僕がスピー

カーとして名前が出ていたから知っていましたので、再会することができました。Yadaさんは国際プログラムの一期生。私は二期生はやったかどうかわからないけど、タイの文部省からの留学できて、まあ、女性で英文学かなんかだったのかと思うんだけど、英語が流暢だった。だから非常に教育もしやすかった。Yadaさんは埼玉大学で何をしていたかという、日本は最初は技術を輸入したんだけど、それを自分自身で消化して自分の力にして、それを基に輸出商品を作り上げたという、そのプロセスをデータベースで研究開発費とか輸出額とか、それから産業だったら産業のGDPだとかそんなものを結び付けて、それがその時々によって変わるとデータも違う分析方法も違う方法で分析した。データも違うし分析も違う。技術輸入の時代と、それを基に高度成長を遂げた時代、輸出競争力がどんどんついていった時代と。それが彼女のことを例にしますと、私の研究は多かれ少なかれそういう感じのものだ。

ダイナミックなプロセスはね。定量的に難しいんだ。難しいことをやるから論文になるんだがね。

彼女はそういう論文を埼玉大学で書いた。ちょっと戻るけどイギリスの大学で講演していたら彼女が突然現れてそこの大学の博士課程にいたんですよ。今度はタイの国費留学でしょうね。その後無事に博士号を取りタイに帰り、科学技術庁行政のトップに就いたと聞いております。



小谷 Yadaさんは私の一級上でした。いろいろな出会いがあるんですね。次のスタンフォード大学ではどんな風でしたでしょうか。

児玉 その次の年にはスタンフォード大学に移って「科学技術と社会」という教育プログラムを講義した。この時の40人ぐらいの学生は大学院生も含めて学部生が多かったし社会経験のない学部生、大学院生でした。ここで初めてそういう経験をしたんです。むしろ私にとっては新しい経験で新鮮でした。ケネディスクールは社会人だったから良く理解できたと同様に、学部生の彼らは、私の講義をよく理解したんですね。社会経験のない学生を教えた私の経験と彼らの反応を見てたら、実はその中に、米国の逆転を考えると非常に印象に残るようなことがあった。で、これはなぜかというと、社会経験を直接持っていない学生が私の技術マネジメントについての講義をなぜ自然と興味を持ち理解してしまうのでしょうか。不思議でしょ。小谷君だって学部の時、政策科学を聞いたってチンプンカンプンでしょ。その秘訣が、日本に帰ってきて東大なんかで学部学生を教えてみてわかった。スタンフォード大学の社会経験のない学生はですね、実際の経験はないけれども、将来の自分の姿を頭の中で幾度となくシミュレーションしてたんじゃないかと思うんですね。これで吸収が早かった。

同じような年で若い子なんだけれども目を輝かせてちゃんと分かったというんだね。Term Paperを出させて評価したら、やっぱりかなり理解していたね。で、よくよく考えたら、ああそうか、ああいうのがシリコンバレーで米国の繁栄を支えたのかということが何となくわかったような感じです。

小谷 アメリカのベンチャー企業の底力ですね。アメリカから帰国してから東大に行かれたわけですが。

児玉 そこで米国を後にして1993年に帰国してまだ、政策科学研究科にいたんですよ。政策科学研究科を離れた理由はだんだんと研究の焦点と興味企業が企業における技術経営に移って行った。論文もそちらに傾いていったわけですね。論文とか著作とかはハーバードビジネスレビューとかビジネススクール関係の著作になっていった。まあ、そういうことで政策科学研究科を離れて行ったのが東京大学の先端科学技術研究センター。みんな略して先端研と言った。東大の工学研究科の中の先端学際工学専攻で、博士論文を書く学生はこの専攻で論文を書く。そこで研究を指導し、これはもう完全に社会人といっても非常に多くの経験を積んだ社会人。ケネディスクールにきたような学生ですね。先端研は、学生は博士課程しかないというところ。

小谷 今度は博士課程の指導を担ったわけですか。ここでも学生は社会人だったのでしょうか。

児玉 東大では定年退職までに大体18名くらいの博士論文の指導をした。もちろん学生は全員社会人で、出身は工学部が多かったけど必ずしも工学部とは限らない。色々技術経営について企業のヒアリングとか調査し、報告書にまとめることをやってきた来た人ですね。

彼らもそういうことをいろいろとやってきて何か博士論文としてまとめたというところで私の所へやってきたのが多いですね。

小谷 学生のバックグラウンドはシンクタンク等の方が多いのですか。我々の時とは様変わりですね。時代とともに要求は変わってくるということですね。その頃の社会人学生の意識はどうでしたか。

児玉 その頃になると特許データなどはコンピューターにデータベースが入っている。そういうデータをふんだんに使えば色々な分析が可能になる。それでしかも普遍的なものになる。ということで論文のテーマは落ち着いたものになっている。

彼らは結局、大学に転身するんです、結論的にはね。論文そのものは、長いことかかってね。フルタイムではないからね。仕事しながらだから、1年や2年、休職するという方もいたよね。自費で、派遣ではないからね。テーマは技術経営ですよ。結局は技術経営あるいはMOTというのは色々な大学で必要でしょ。だからみんな職を得てかなりの大学にそういうことで散っていったね。

小谷 ちょうど政策科学に日が当たってきたということでしょうか。当時の社会人学生の思い出などありますか。

児玉 具体的に言うのだね、今日の日経新聞に経済教室について書いている。今、東北大学の教授をしているんだけど。(たまたまインタビューの日の日経に掲載された)

約18名位いたんだけどね。実はその中にマレーシア政府の派遣で埼玉大学の研究科に来ていたRamanさん(※1985年入学国際プログラム二期生)、文部省の日本政府の留学生として修士号を取った。で、帰国してし

ばらくしてマレーシア政府の奨学金で日本への留学を自ら選択して、アメリカとかイギリスとかあるのに日本を選択して私がいる東大の先端研に入学してきた。

この人はさっき言ったYadaさんの修士論文をもっとさらに精密に分析したという感じですね。社会人の彼はフルタイムで来ていたのだけれども3年間では難しいんだけど彼は3年ですんなり取った。実は彼の博士論文はイギリスの「リサーチポリシー」という、我々の分野で最も有名な英文誌に掲載された。(ぼくはそのエディターとかやっていたんだけど)。かなりCompetitiveな論文集だよ。採択率が非常に低くて掲載には厳しいところだね。そこへすんなり出して掲載された。

彼だけではなく、18名の何人かはそういう博士論文が非常にプレステージアな学会誌にアクセプトされていた。彼はその後帰国して国連関係のアセアンの地域センターの所長を長くやっていたんだよ。その関係で日本に来ていたり、僕もマレーシアに行きって講演したり、会ったりしていた。マレーシアはそのころ急に豊かになったのかな、それで彼は海外からジャーナリストとか学者を招いて話を聞くというより、マレーシアは何を考えているかを皆さんにお伝えしたいと。いろんな国から来ていたと思う。楽だったね、Ramanさんの紹介で政府の要人にボンボン会えるんだもの。Ramanさんとは、埼玉大学そして東大に来て、彼とは色々とおあって今でも関係が続いています。

小谷 次には芝浦工業大学のご経験をお聞かせください。

児玉 東大を定年退職した後は、今度は芝浦工業大学、これは専門職大学院という制度が発足してね、要するにプロフェッショナルなことをちゃんと大学で学ぶと。その第1号が芝浦工業大学に工学マネジメント研究科いわゆるMOTの大学院ができた。その学生は企業が中心ですね。もちろん奨学金制度もあったが。自費でしかも夜間・夜6時過ぎと土曜日に集中的に学習する。彼らは本当にちゃんと働いているが、すごく勉強意欲に燃えていた。要するに企業で働きながら勉強するというタフな道を自ら選んで入学した学生で。修士論文をさらに発展させて博士論文に仕立てた人も何人かいて、元の企業に戻って管理職に昇進したりというのがありました。

社長も入学してきた。社長のまま入学して、その中には自分の会社を一兆円企業の大企業に仕立て上げた人もいる。それから一兆円にはならないけど、企業を立て直した、自らの力で。そういう人もいた。

小谷 専門職大学院の話は聞いていましたが、社長さんも入学した方がいるんですね。自費で会社と大学院の二足のわらじで取り組む苦労はちょっと想像できませんね。

ところで先生の著作「ハイテク時代のパラダイム」は吉野作造賞を受賞していますね。受賞されたものを見ると異色かなと思ったのですが。

児玉 吉野作造賞の受賞について異色というのは工学部出身者で初めてだったと思うよ。題材も私の著作のようなものは見当たらないようだしね。実は評価委員の中に外務大臣もやった大来佐武郎さんがいて、東大の電気科を卒業している。経済企画庁なんかを経験している。まあ、彼なんか推してくれたみたいです。ハーバードから帰ってきたとき、興味は技術、企業の経営、マネジメントに移ったんですね。技術融合だって結局マネジメントの世界だよ。1992年に、ハーバードビジネスレビュー誌に、論文を寄稿した。それからあと、帰ってきてしばらくしてハーバードビジネ

スクール出版会からマネジメントに特化した本※を出版した。1995年だ。(※Emerging Patterns of Innovation, Harvard Business School Press)

小谷 先生はもう第一線を退かれてはいますが、ライフワークは何かありますか。

児玉 ライフワークとしては、今、こういうものを全部まとめて、英語の本※を書いているんですけど、いろいろとまとめる時代となってきました。(※Demand Articulation of Emerging Technologies, Cambridge Scholars Publishing, 2019年10月刊行)

小谷 座右の銘はありますか。

児玉 座右の銘はなし。ユニークでしょ。自然体ですね。それしかないですよ。あるがままにそういうことだね。やりたいことをやっていく。

小谷 最後に同窓生や学生諸君へのメッセージがありましたら。

児玉 社会人学生に一言。いま起きていることは100年に一回くらいの大きな変革時代。それこそGAFA、それからビッグデータベースで何でもかんでもやっちゃうというわけでしょ。AIは昔からあったんだけど、今はビッグデータがあるからそんなことが可能になったんでは。要するに全然違ってきちゃったね。だから、僕もそろそろ潮時かなと。学生諸君も大変ですね。まあ、原点に戻ればいいんじゃないですか。基礎的に考えると。政策科学とかそういうことでね、勉強した人はそこに戻って考えればいいんじゃないかな。惰性に流されないで、自分で考えなくてはしょうがない。学生諸君に一言「大変ですよ」と。要するに「頭を柔らかくしてください」と。だけどそういう画期的な時代には、やっぱり論理立てて考えるしか方法がないわけだからね。

小谷 長時間にわたってありがとうございました。先生もご健康に留意されて、これからも論文の執筆などご活躍を期待しております。ありがとうございました。
(小谷和弘・1988年GSPS修了)

国内同窓会第二期役員体制発足 ～新たな気持ちでこれから2年！

名取はにわ会長メッセージ

2019年11月23日、会長に再任されました。

規約上今期が最後となりますので、皆様、どうぞよろしく願いいたします。

GRIPSの国内同窓会ができたことを契機として、国内の支部がどんどん増えてきました。とてもうれしいことです。

また、田中学長をはじめとする教職員の大変なご努力により、国外同窓会もとても活発です。

国立法人で唯一の社会科学系大学院大学GRIPSは、国連の提唱するSDGsに、高い視点に立って取り組んでいます。

留学生達の本国での活躍と新たな留学生の派遣、国内OBの活躍によって、様々なWINWINの関係が生まれ、GRIPSが発展することを願っています。

おかげさまで、国内同窓会は役員の数も増え、盛り上がっています。みんなで本大学院を盛り立て応援していきましょう。

【会長プロフィール】

1973年法務省入省。1980年埼玉大学大学院政策科学研究科修了。高木誠一郎先生の指導の下、政治学修士を取得。1999年男女共同参画社会基本法成立に携わり、2005年には内閣府男女共同参画局長として第2次男女共同参画基本計画に携わった。(現職:学校法人日本社会事業大学理事長)



国内同窓会総会であいさつする名取はにわ会長(2期目)

オンライン修了生名簿をご活用ください

オンライン名簿は、国籍、所属機関、修了年度、プログラムという枠を超え、国内外に広がる政策形成に携わるネットワーク構築に役立てていただける貴重な財産です。ぜひご活用ください。

何ができる？

GRIPS/GSPS修了生情報(出身国、勤務先、プログラム、メールアドレス等)が検索できます。

どう活用する？

「担当業務で行き詰った時、他県の担当者を探し、情報交換をする」、「自分の県・市と国際友好都市になった国の修了生を探す」、「取引先に修了生がいるか探す」などにご利用いただけます。

アクセス方法は？

<https://gportal.grips.ac.jp/fw/dfw/ASTSV004/>にアクセス、GRIPSのID

(学籍番号)とパスワードでログイン、表示されたGateway画面から、「メニュー」→「教員・学生検索」→「修了生検索」で検索画面が表示されます。

ID(学籍番号)を忘れてしまったら？

alumni@grips.ac.jpまでご連絡ください。

パスワードを忘れてしまったら？

ログイン画面に表示される「Forgot your password?」をクリックして、再設定してください。

情報はどこまで公開される？

オンライン名簿上での限定公開です。修了生、学生、教職員など、ログインID及びパスワードをお持ちの方にのみ公開されます。

情報の登録、公開にご協力ください。



国内同窓会副会長・幹事プロフィール

新任副会長・幹事

(職順・修了年次順)

副会長 山本亮三(やまもと りょうぞう)



1978年兵庫県庁入庁。1985年埼玉大学大学院政策科学研究科修了。大山達雄先生にご指導いただいた修士論文でオペレーションズ・リサーチ学会学生論文賞をいただけたことが忘れられません。阪神淡路大震災からの復旧復興をはじめ、多様な県土が広がる兵庫県で様々な地域の課題に携わることができました。2017年に県を退職し、現在は兵庫県の芸術文化の振興に自らも楽しみながら取り組んでおり、GRIPSの先生方にも引き続きお世話になっています。(現職:公益財団法人兵庫県芸術文化協会理事長)

副会長 反町敦(そりまち あつし)



1979年群馬県庁入庁。1988年埼玉大学大学院政策科学研究科修了。修士論文は榊原健一先生にご指導いただきました。群馬県庁では予算編成、目標管理、世界遺産登録、コンベンション建設などに携わりましたが、2019年8月副知事の任期満了により退職。現在は群馬大学経営協議会委員、群馬県庁生活協同組合理事長を務めています。

幹事 関口吉男(せきぐち よしお)



1978年日本国有鉄道入社。1987埼玉県入庁。1996年埼玉大学大学院政策科学研究科修了。修士論文は伊藤大一先生と刀根薫先生に指導いただき、第三セクター都市鉄道の課題に関するものでした。2016年3月に定年退職。現在、橋梁を修繕する会社でインフラのリニューアルや大学で交通論の講義等を行っています。(現職:ショーボンド建設株式会社理事)

幹事 鈴木賢一(すずき けんいち)

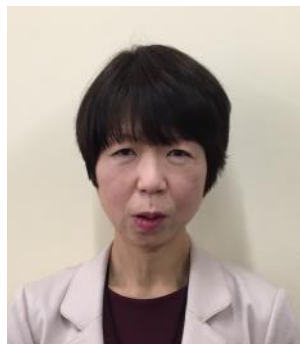


1989年千葉県庁入庁。1996年埼玉大学大学院政策科学研究科修了。修士論文は辻琢也先生にご指導いただきました。先生と一緒に各地を視察し、事例研究を行ったのが印象に残っております。現在、千葉県管理の港湾を管理、維持している港湾課に在籍し、課内の予算や人事等を担当しております(現職:千葉県県土整備部港湾課副課長)。同窓会の役員として恩返しができると思っています。(現職:千葉県県土整備部港湾課副課長)

再任副会長・幹事

(職順・修了年次順)

副会長 稲葉尚子(いなば なおこ)



1981年埼玉県入庁。1989年埼玉大学大学院政策科学研究科修了。修士論文は、政治学の伊藤大一教授に指導を頂きました。埼玉県庁退職後、口腔の健康が、健康寿命延伸のためにも最も重要な要素の一つであることをどんどん広めるべくがんばっています。(現職:埼玉県歯科医師会事務局長)

副会長 柏木修一(かしわぎ しゅういち)



1987年東京消防庁入庁。1992年埼玉大学大学院政策科学研究科修了。修論の指導教官は、横道清孝先生でした。2019年4月から現職。都内における火災、救急、救助などの災害活動の責任者をしています。また、日本火災学会の企画担当の常務理事をしています。(現職:東京消防庁理事)

幹事 小谷和弘(こたに かずひろ)



1975年日本電信電話公社入社。1988年埼玉大学大学院政策科学研究科修了。児玉文雄教授に指導をいただき、特許情報による技術融合とイノベーションスパイラルの計測を研究しました。2004年2月にNTTを退職し宇都宮市立星が丘中学校長、泉が丘中学校長に就任し2012年3月に定年退職。2年間の栃木県教育委員会を経て(一社)日本非開削技術協会事務局長を5年勤め2018年退職し、現在自由の身です。

幹事 高木昭美(たかぎ あきよし)



1981年千葉県入庁。1988年埼玉大学大学院政策科学研究科修了。刀根薫先生のご指導の下で幕張メッセの経済効果を研究しました。2014年3月千葉県庁を定年退職。その後、大学で地方自治を講じて7年目です。政策情報学会理事、千葉県生涯大学校講師などもしています。(現職:芝浦工業大学工学部・建築学部非常勤講師)

2019年度国内同窓会を開催しました！



2019年度国内同窓会開催 ～同窓会の充実に向けて～

2019年11月23日に国内同窓会が開催されました。第一部の総会では、総会に先立ち、GRIPSの田中明彦学長からSDGsに関するご講演をいただきました。世界の課題をどう克服するか？大変関心度の高いお話でした。続きまして、高木昭美幹事から同窓会の近況報告がなされ、国内各地や海外において同窓会が(個々人の交流も含め)活発に行われているとのことでした。

次に、国内同窓会の発足から2年となりますので、規約に則り、同窓会の会長選出が行われ、満場一致で名取はにわ現会長が再任されました。同窓会も3年目になることから、会のさらなる発展に向けまして、副会長と幹事の増員をそれぞれ2名行い、副会長は、現副会長の稲葉尚子氏と柏木修一氏に加え山本亮三氏(1985年修了)と反町敦氏

(1988年修了)が新たに指名されました。また、幹事につきましては、現幹事の小谷和弘氏と高木昭美氏に加え鈴木賢一氏(1996年修了)と関口吉男氏(1996年修了)が指名されました。

続く大学からのお知らせでは、横道清孝理事・副学長からオンライン修了生名簿の更新、公開、活用の依頼がありました。

第二部の懇親会は、田中学長の挨拶、名取会長の乾杯で始まりました。懇親会からの参加者を含め、卒業生、在校生、当時の教職員、現教職員の皆様との旧交を温めることができました。最後に、大山達雄名誉教授から中締め挨拶があり、大山節でお開きとなりました。なお、第一部第二部とも約60名の参加があり、盛大に開催されました。

(関口吉男・1996年GSPS修了)



写真
右:懇親会の模様

左上:田中学長のご講演

左下の左:名取会長



国内同窓会支部活動報告

～各地から続々と報告が寄せられています！

修了生の皆様へ～支部設立をお手伝いします！

国内同窓会は、各地方自治体、中央省庁等様々な単位で支部が発足しています。今後、国内同窓会への新たな参画を希望される方、また、修了生による懇親会の予定があり、新たに同窓会支部を発足させたいとお考えの皆様は、ぜひ、以下の担当までご連絡ください。教職員が出席して、支部発足のお手伝いをいたします。

■ 本件担当：嶋田麻子、柳元彩子

■ 連絡先：alumni@grips.ac.jp

(掲載順不同)

東京消防庁支部～令和元年の同窓会を開催

新元号となってから初の支部同窓会を昨年6月28日、横道先生、大山先生、諸星先生、畠中先生をお招きし、四谷駅の近くで開催しました。当日は多くの参加者があり、今年度派遣者による横道先生、大山先生の研究室訪問の動画や、修了生の現職務を紹介する動画を上映しました。動画に登場した写真や品物の思い出話や、参加者の近況等、話題は尽きることなく、大変盛り上がりしました。

(山越靖之・2018年GRIPS修了)



兵庫県支部～大山先生を囲む懇親会を開催

修了以来40年近くの兵庫県と神戸市の退職者を含め、10名が久しぶりに大山達雄先生を囲み旧交を温めました。修了生は、県だけでも、地域政策プログラム・コースに加え、GSPSや防災・危機管理コース(防災・復興・危機管理プログラム)を含め36名の在所で、県の要職で頑張っています。なかなか集まる機会がないのが現状ですが、先生方が来神される機会に集まれればと思っています。

(山本亮三・1980年GSPS修了)

千葉県支部～大山先生を囲む懇親会を開催

昨年8月30日、大山先生をお招きして千葉県支部修了生と大山先生を囲む懇親会を東京駅近くのお店で開催。現役県庁マンのほか定年退職者も参加。話題は思い出話からOR研究の未来まで、大いに盛り上がりしました。

(高木昭美・1988年GSPS修了)

広島県支部～横道先生を囲んで第2回同窓会開催

2019年8月3日GRIPS理事で副学長の横道先生をお迎えし、広島県支部修了生の同窓会を開催。会場は世界遺産「原爆ドーム」のほど近く、“囲炉裏”で和む居酒屋です。先生を囲んで旧校舎や六本木キャンパスでの思い出を語りあい、また、先生から本学公共政策プログラムの多彩な分野別コースのお話をお聞きするうちに、“再び学びたい”との思いも沸々と。瀬戸内の魚やアナゴ料理を堪能しながら、昔懐かしい楽しいひと時を過ごしました。

(藤川延久・2002年GSPS修了)



熊本県支部～横道先生を囲む懇親会を開催

昨年8月26日、横道先生が来熊された際、修了生と先生を囲んでの懇親会を熊本市内で開催し、県支部を結成いたしました。なお、当日は、現役県庁職員が5名参加。横道先生には全員が在学中にお世話になっており、それぞれの代のエピソードなど話は尽きませんでした。

(中尾郁美・2014年GRIPS修了)



香川県支部～横道先生、大山先生を迎えて支部を設立

去る8月22日、横道先生、大山先生をお迎えして同窓会香川県支部の設立総会を兼ねて懇親会を開催しました。懇親会は、県庁のメンバーの他に、埼玉大学大学院政策科学研究科で大山先生が指導されたJR四国の半井社長も参加し大いに盛り上がりしました。

(吉岡利浩・2019年GSPS修了)



福島県支部～横道先生を囲む懇親会を開催

福島県支部では、毎年、同窓会を開催しております。昨年は横道先生の来県に合わせ、8月7日に県庁の近くのお店で、横道先生を囲む会を開催いたしました。思い出話や、若手の近況報告などで大いに盛り上がりました。
(古尾谷直樹・2006年GRIPS修了)



(一部修了生以外の方も含む)

刀根薫先生を囲むささやかな昼食会を開催しました

昨年11月の国内同窓会の同じ日に、同窓会行事とは別に、恩師 刀根薫先生と先生に御指導をいただいた修了生との楽しい昼食会を開催しました。当日はGRIPS校内の会議室をお借りして、おいしいお弁当をいただきながら、お話を伺いました。先生のおかげで博士号をいただいた修了生も顔を出しています。

刀根先生は、会報第2号の恩師インタビューに寄稿いただいたようにシステム工学、ORの世界的権威です。米寿をお迎えとは思えないほどお元気で、最近の研究について、いまだ衰えない情熱を語る先生に教え子一同、恐悦至極でした。

日程調整、会議室の手配等いただいた畠中先生、事務局の皆様ありがとうございました。
(高木昭美・1988年GSPS修了)



埼玉下水処理場見学ツアー

11月2日(土)に荒川水循環センターにおいて開催された埼玉県水処理場見学ツアーに参加致しました。日頃、ほとんど知ることができない下水処理の現状を知る大変貴重な機会となりました。

VTRによる概要紹介のあとで、施設の方から下水処理の重要な役割について詳しく説明していただきました。特に、下水の汚れの大半が家庭から排出されており、当たり前の暮らしを支えるうえで下水処理は極めて重要であることを再認識させられました。また、ライフラインの要ともいえる下水処理の仕事に対して誇りをもって取り組んでらっしゃることが話の端々からヒシヒシと伝わり、非常に感銘を受けました。

その後、実際の施設見学では、最初に流れてきた汚水の大きなゴミを除去する沈砂池からスタートし、微生物の働きによって汚れを分解する反応タンクなども見ることができました。沈砂池では少し匂いがありましたが、反応タンクで処理した水に匂いはほとんどなく、下水処理の精度の高さを肌で感じました。

最後に、顕微鏡で汚れを分解しているクマムシなどの微生物を観察する機会をいただきました。一緒に見学会に参加していたお子様たちも真剣な眼差しで顕微鏡をのぞき込む姿は大変微笑ましく思いました。

見学後の懇親会でも多くの方々と親交を深めることができましたので、このような機会を設けていただいたGRIPS同窓会担当の方々及び埼玉県支部の関秀治さんに改めて感謝を申し上げます。

(石倉義之・2010年GRIPS修了)



埼玉県支部～同窓会deちゃんこ鍋

積雪も予報された1月27日、創成の地・浦和に大山先生、横道先生、高田先生、畠中先生はじめGRIPSから多数ゲストをお迎えし、ちゃんこ鍋を囲む懇親会を開催。昭和平成令和3世代の学生がそれぞれ大山・横道両先生との思い出を語り、お二人を筆頭に先生方、事務局の皆様との心の交流こそ今日の同窓会の礎なりとしみじみ思う温かな夜でした。ごっちゃんです。

(豊島浩明・2015年GSPS修了)



愛媛県支部の発足について

愛媛県には、23名の修了生等がおります。今回県支部の発足を呼びかけましたところ、全員のご快諾を頂き、2019年10月28日松山市において、横道副学長のご来県も頂き、県支部発足準備会を開催いたしました。

今後同窓生の親睦、研鑽の機会を創出し、息の長い活動を行って参りますので、同窓生の皆様もご来県の際には是非お声がけ下さい。

(徳永泰伸・1994年GSPS研究生)



愛媛県庁本館

大学の動き

フィリピン同窓会が開催されました



昨年6月21日、フィリピン中央銀行創設70年、GSPS創設40年、GRIPS創設20年を記念して、フィリピン・マニラにて同窓会を開催しました。大学から、田中学長、横道理事・副学長、増山理事・副学長をはじめとする多数の教員が、そして、フィリピン各地からも多くの修了生が出席して、大変盛大な会となりました。第1部のAcademic Conferenceには中尾アジア銀行総裁、羽田在フィリピン日本大使、和田JICAフィリピン事務所長にもご出席いただきました。第2部のAlumni Homecomingでは、正式にフィリピン同窓会組織が発足し、幹部修了生により、今後の運営について展望が語られました。

カルチャーディを開催しました



昨年9月7日、大学においてカルチャーデイが開催され、茶道、書道、日本の伝統玩具等を紹介するワークショップや、インドネシア、パキスタン、アフリカ、ミャンマー、フィリピン等のダンスや歌の披露、各国の民族衣装によるファッションショーを行って、学生や友人たちがそれぞれの国の文化を紹介しました。



2019年9月 秋季学位記授与式举行

昨年9月11日、GRIPS創設以来19回目の秋季学位記授与式を举行、159名(修士149名、博士10名)に学位が授与されました。フィリピン中央銀行総裁のAmando M. Tetangco Jr.様による記念講演を賜り、修了生代表としてYoung Leaders ProgramのConstantino German Jr. Songaliaさん(フィリピン中央銀行)が修了後の抱負を述べました。

出席した国内同窓会役員の声

素晴らしい修了式でした。各国の修了生は眼を輝かせ、修了証書の受け取り方もそれぞれ微妙に違って、お国柄がうかがわれました。アマンド総裁の記念講演は修了生への最高のメッセージでした。
(高木幹事)



「水と文化」国際シンポジウムを開催しました

2020年2月3日、『「水と文化」国際シンポジウム—水の遺跡から地域の発展を考える—』を開催しました。このシンポジウムは水と人との関係や、水を通じた文明・文化の形成過程について最新の研究内容を共有するため開催したもので、43の国と地域からおおよそ260人が参加しました。このシンポジウムには天皇、皇后両陛下も御出席され、両陛下は終始うなずきながら熱心に聴講されていました。併せてこの日、本学内に設置された国連地域開発センター東京オフィスの開所式も行いました。



国内同窓会からのご案内

社会科見学会～川崎キングスカイフロント

国内同窓会の活動として同学修了生並びに同学国内プログラム学生が、現代の先端的な施設などを見学します。

今回は、健康・福祉・医療、環境などに関わるライフサイエンスの研究開発拠点として現在整備が進められている「川崎キングスカイフロント」を見学します。

- ・訪問先
川崎キングスカイフロント(川崎市川崎区殿町)
- ・訪問予定日
2020年5月15日(金)
- ・日程
13:00 川崎市キングスカイフロントマネジメントセンター※集合

※川崎駅より直通バスあり

公立の研究所2か所、大学・企業系の研究所または事業所1か所計3か所を訪問予定

17:00 終了

18:00 懇親会

・参加申込

4月30日(木)までに、氏名、連絡先(メールアドレス及び携帯電話番号)、勤務先、修了年(お分かりになれば)、懇親会ご参加の有無をご連絡ください。

■本件担当: 嶋田麻子、柳元彩子

■連絡先: alumni@grips.ac.jp

大学からのご案内

GRIPS基金ご協力をお願い

GRIPSには、ミッドキャリアの行政官を中心に、日本を含む世界58の国と地域から学生が集まっており、世界で活躍できる指導者・政策プロフェッショナルの養成に努めています。皆様から募った基金を奨学金として、未来のリーダーを支援することにより、日本及び世界の持続的発展に繋がること、また、研究資金として、本学の政策研究活動を支えることにより、この分野での世界における本学ひいては日本のプレゼンスの向上に繋がることが期待されます。基金へのご寄付は、銀行振込・クレジットカード決済にて受け付けております。ぜひ、皆様のご支援をよろしくお願い申し上げます。 <http://www.grips.ac.jp/jp/about/gripsfund/>



【お礼】2019年11月23日に開催された国内同窓会では、同窓会の皆様のご協力により、寄付金付きGRIPSグッズの販売を行いました。これは、GRIPSロゴマーク入りグッズを販売し、売上額から作成費用や送料などの実費を除いた額を、修了生有志の皆様からのご寄付として、GRIPS基金に入金させていただくというものです。また、すでにGRIPSグッズをお持ちの方も手軽にご寄付をいただけるよう、募金箱を設置いたしました。その結果、80名を超える多数の皆様(在学生含む)がGRIPS基金の趣旨にご賛同くださり、合計21,902円をご寄付いただきました。誠にありがとうございました。



新しいプログラムが始まります

2020年度より、夜間・土曜のみの就学で学位取得が可能な新しいプログラムとして、「国際的指導力育成プログラム」及び2年制の「科学技術イノベーション政策プログラム」が始まります。また、修士課程公共政策プログラムに「国際協力コース」が新設されます。ぜひ、勤務先等でご案内ください。



国内同窓会報に掲載する原稿を募集します

国内同窓会の各支部や各地域の会合のご案内、開催のご報告、会員の近況などを掲載したいと思っています。修了生紹介「政策の現場から」に登場くださる方も自薦他薦問わず募集中です。寄稿、行事のお知らせや写真など、alumni@grips.ac.jpまでお送りください。

GRIPSフォーラムを開催しています

GRIPSフォーラムは、政策に関わる諸問題への理解を深める場として、本学の政策研究に関する広範なネットワークを活用し、各界のリーダーや有識者を招いて開催されています。毎年十数回、日英同時通訳にて行われ、正規課程の学生には授業の一環として単位化されているほか、一般の方にも広く公開しています。ぜひ、ご参加ください。



http://www.grips.ac.jp/jp/events-cat/grips_forum/

【開催概要】

日時: 春学期(4～7月)及び秋学期(10～1月)の月曜日 16:40～18:10
場所: 本学1階 想海樓ホール

■■編集後記■■■■

この度、国内同窓会報第3号を発行することができました。編集委員会では、同窓生の役割を高めようということで、高木委員が全体構成から執筆も含め作業の大半を担ってくださいました。また、大学事務局の皆様には微に入り細に入りお世話になり有難うございました。現在、新型コロナウイルス感染症が、グローバル社会の困難な一面として現れていますが、全世界がこの対応に力を注ぎ克服できることを祈っています。同窓会も未来に向けて充実できるように、ゆっくりでも確実に歩んでまいりますので、ご協力をよろしくお願いいたします。(関口幹事)